

入院児の心理状況に関する一考察

～ICT 活用の有効性の視点から～

藤中真帆

(安田女子大学大学院文学研究科)

研究の目的

本研究は、入院中の児童を取り巻く学習環境をより良くするため、院内学級における ICT 活用の有効性を明らかにすることを目的とする。

方法

CiNii Articles や CiNii books、安田女子大学図書館、岩国市立図書館において、院内学級、慢性疾患、病気の子ども、病弱教育、学童期、病気、受容、小児看護、AI、ICT のキーワードを用い、検索した 44 点の先行研究を収集した。本発表では 40 点の文献を「院内学級の意義」、「ICT の必要性」、「入院児の心理状況」の観点で文章を抽出し、内容を分析した。

結果

次の 3 つのことが明らかになった。

1 つは、院内学級は、子どもと保護者それぞれにとっての側面から、意義が示唆された。子どもにとっては入院に伴い生じる学習空白の補完という教育的側面や、“入院患者”としてではなく“子ども”本来の姿を取り戻すことで、治療意欲や生活意欲を向上させ、子どもの発達に必要な学びや遊びの場としての機能を有しているなど、18 個のカテゴリーが見出された。保護者にとっては普段病室では見られない子どもの姿や表情を見る機会を得ることで、子ども理解につながるなど、2 個のカテゴリーが見出された。

2 つ目に、入院児の心理状況は 9 つのカテゴリー (①友達と遊べないことや、生活行動様式の制限に対する【苦痛・ストレス】、②学習に対する【不安】、③【自信喪失】、④家族や友達に会えない【寂しさ】、⑤【劣等感】、⑥身体活動に対する【欲求】、⑦否定的な【自己概念】、⑧無関心や無力感といった【情緒的問題】、⑨前籍校とのつながりの維持に対する【安心】) に分類された。

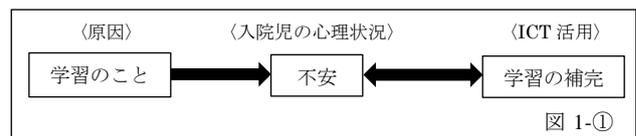
3 つ目に、「ICT の必要性」の観点では、ICT 活用にあたり、子どもと教師それぞれの立場にメリットとデメリットが見出された。さらに、ICT は通常学級においても活用されており、ICT を活用することで、できなかったことができるようになる体験を通して、苦手意識が改善するなど、通常

学級での活用と共通するものも確認された。

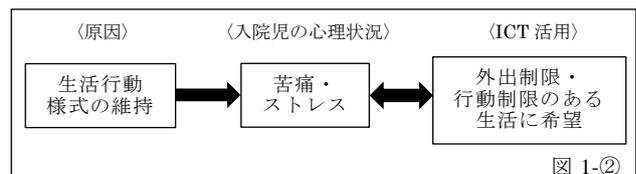
考察

ICT 活用について、近年ではすべての教育現場で重要視されるが、院内学級の ICT 活用に焦点を当てた本研究では、「入院児の心理状況」と相互に関連しており、通常学級には見られない、院内学級特有の活用の有効性が示唆された。本研究では、学習のことや生活行動様式の維持の困難などの原因が入院児の 9 つの心理状況を引き起こし、その負担軽減に寄与しているものとして ICT が有効に活用されているという関連性が見出された。そのうち 2 つを図 1-①、図 1-②に示す。

例 1：入院児は学習のことに【不安】をかかえている。そこで ICT を活用することにより学習の補完をすることができる。ICT を活用し、学習の補完を行うのは、通常学級にも共通することである。しかし、“勉強についていけないのではないか”という通常学級の児童の不安とは異なり、入院児の不安は、“勉強をすることができるのだろうか”という、学習の機会への不安も含まれることから、入院児の心理状況と関連して ICT 活用の有効性が高くなる。



例 2：病気やケガの治療によって、生活行動様式の維持が困難になることが原因で入院児は【苦痛・ストレス】を感じている。そのような心理状況であるからこそ、遠隔操作のロボットやタブレットを活用して外出制限・行動制限のある生活に希望をもたせるという ICT のメリットを生かすことができる。



付記

本研究は、令和元年度に安田女子大学教育学部へ提出された藤中真帆（指導教員：宮崎久美子）の内容を再構成したものである。